# 御木本幸吉と真珠

かつて相島と呼ばれたミキモト真珠島で、1893（明治26）年７月11日、御木本幸吉と妻のうめは実験したアコヤ貝から５個の半円真珠を発見しました。人類初の真珠養殖の成功の偉業に学びましょう。

真珠王と呼ばれた御木本幸吉。

## もくじ


50 御木本幸吉とは、どんな人物?
51 うどん屋「阿波幸」の吉松少年
52 東京・横浜へ見聞の旅に
53 志摩の海産物商になる
54 師とのめぐり会い
55 幸吉と妻うめ
56 養殖真珠の誕生
57 真円真珠への夢
58 博覧会で注目を集めた養殖真珠
59 発明王が認めた「世界の真珠王」
60 ふるさと発展のため伊勢志摩を国立公園に
61 御木本幸吉ゆかりのところ
62 ミキモト真珠島
64 真珠王のことば

# 御木本幸吉とは、どんな人物？

昔、真珠といえば天然真珠のことでした。海女が海に潜ってとってきた、たくさんのアコヤ貝の中からほんの数粒しか見つからない、とても貴重で高価なものでした。

「何とかこの真珠を人の手で生み出すことはできないだろうか」と考えた幸吉は、妻うめとともに、真珠養殖を一生の仕事としました。鳥羽や志摩の海で実験を重ね、多くの失敗や不運にもくじけず、夢を持ち続け、ついに、鳥羽の相島（現在のミキモト真珠島）で半球の真珠（半円真珠）の養殖に成功したのです。

鳥羽で生まれ、96歳まで長生きした幸吉は、人類のだれもできなかったことを成しとげ、やがて、真珠養殖を産業にまで発展させて、世界の人たちから「真珠王」とよばれるようになりました。

ミキモト真珠島内に建つ御木本幸吉銅像。

幸吉は生涯にわたってふるさと鳥羽を大事に思い、養殖真珠の誕生の地に、1951（昭和26）年、ミキモト真珠島を開きました。

女性に真珠のネックレスをかける幸吉。（漫画家・北沢楽天の絵）

真珠のネックレス。

とばっこミニ知識

36 アコヤ貝と、アワビとの大きなちがいは？

☆アワビは巻き貝、アコヤ貝は二枚貝です。

# うどん屋「阿波幸」の吉松少年

鳥羽市の町なかに、「御木本幸吉生誕の碑」という石碑が建っているところがあります。

幸吉は、「阿波幸」というう どん屋を代々営む音吉・もと夫妻の長男として、江戸時代の終わりごろの1858年に生まれました。

幸吉の少年時代の名前は「吉松」といいました。父親の音吉は、発明の才能のある人で、使いやすい粉ひき機械（石臼）を考えるなど、研究熱心でした。

一方、吉松が生まれたころは元気で仕事をしていた祖父の吉蔵は商売人で、家業のほかに野菜や薪・炭を売ったり、石材を運送したり、一代で蔵を五つも建てたほどの働き者でした。

御木本幸吉生誕の地の記念碑。（鳥羽市鳥羽２丁目）

成長した吉松少年も、うどん屋を手伝いながら、朝早くには一人でもできる野菜を売り歩くなど、力のかぎり働きました。

御木本幸吉記念館内に再現されたうどん屋「阿波幸」。（ミキモト真珠島内）

うどん屋「阿波幸」で使っていた石臼。（ミキモト真珠島内で展示）

とばっこミニ知識

37 鳥羽市の西側、伊勢市との境にある山地の名前は？

☆朝熊山地。山頂の朝熊ヶ岳（高さ555m）は伊勢市にあり、鳥羽の海の全景が展望できます。

# 東京・横浜へ見聞の旅に

江戸時代から明治時代に移り、外国の珍しい文化がたくさん入ってきて、大きな変化を迎えていました。吉松少年が“幸吉”と名前を改めた1878（明治11）年には、すでに新橋（東京）～横浜間に蒸気機関車が走り、明るいガス灯がともり、洋服を着る人も増えていました。

こうした東京の動きは鳥羽まで伝わり、幸吉は自分の目で確かめてみたいと、東京・横浜へ見聞の旅に出かけました。もちろん、そのころは電車や車はなく、旅と言えば何日もかけて歩いて行く旅でした。

東京に着いて幸吉が見たものは、初めてのものばかりでした。中でも横浜では、天然真珠が薬の原料や女性たちの首飾りとして、高い値段で取引されている光景に出会って大変驚きました。そして、「鳥羽で商売をするなら、地元の海産物を扱うのが一番だ。」と、この時、決心をしました。

しかし、そのころ志摩で獲れる天然真珠は、アコヤ貝千個の中から１個見つかるかどうかの大変貴重なものでした。

幸吉は、旅に出たおかげで大きな発見をしたんだね。

明治時代のまちのにぎわい。（「異人商館の図」より）

とばっこミニ知識

38 答志島（答志地区）の「寝屋子制度」というのは、どういうもの？

☆中学を卒業した男子数名が、寝屋親の家に泊まります。兄弟のように仲良くなります。

# 志摩の海産物商になる

昔から鳥羽・志摩は海女漁が盛んでした。鳥羽の港にはとれたアワビやサザエ、ナマコ、テングサなどが集められ、とてもにぎわっていました。

幸吉は東京・横浜の見聞の旅から帰ると、早速、海産物の商いを始めました。幸吉22歳の時でした。取引きされていた天然真珠も、少しずつ手がけていきました。

やがて、真珠のことなら志摩では誰よりもよく知る人となり、幸吉は海女たちからも信用されるまでになりました。

しかし、このころ志摩のアコヤ貝は、天然真珠を獲るため乱獲されて絶滅の危機にありました。「このままでは志摩のアコヤ貝がなくなる。何とかして、増やすことはできないだろうか。」幸吉は、初めての大きな試練に立たされました。

志摩でとれた天然真珠とアコヤ貝。その下は『三重県水産図解』の真珠について書かれたページ。

アワビをとる海女たち。(『三重県水産図解』より転写)

真珠を扱い始めた幸吉。(32歳のころ)

とばっこミニ知識

39 相差町の菅崎園地にある「春雨殉難記念碑」というのは、何の記念碑?
☆明治時代に、ここで軍艦が沈没し、45人が死亡したできごとを伝える碑です。

# 師とのめぐり会い

「志摩のアコヤ貝が絶滅する」、そんな危機のとき、幸吉の頭に浮かんだのは二人の人物でした。一人は津市の出身で大日本水産会幹事長の柳楢悦、もう一人は東京帝国大学（現在の東大）教授の箕作佳吉でした。

ちょうど、柳が三重に来たとき、幸吉は面会に行きました。英虞湾のアコヤ貝が絶滅寸前であることを話し、アコヤ貝を増殖しないと、志摩の真珠はなくなってしまうと、強く訴えたのです。柳は、幸吉のあまりの熱心さに後日、英虞湾を訪れることを約束しました。

それからしばらくして、志摩を訪れた柳は英虞湾の海を見て「ここなら波も静かで潮の流れもよさそうだ。アコヤ貝の養殖に適している。」と話し、海を見知らぬ人に貸すのを反対していた地元の漁業者に「貝の養殖はこれまでにない、新しい取り組みである。」と言ってくれたのです。

早速、アコヤ貝の増殖をはじめた幸吉は、神奈川県の三崎にあった東京帝国大学の実験所にいる箕作博士を訪ねました。

幸吉は「一体、真珠は人間の手で生み出すことは出来るのでしょうか。」と質問しました。箕作博士は「実際にはまだ誰も成功していませんが、出来るはずです。」と、答えました。幸吉は、誰もやったことがない仕事なら自分がやろうと、この時、英虞湾での真珠養殖を決意しました。

真珠の養殖を始めたころの幸吉。(37歳のとき)

大日本水産会の柳楢悦。

東京帝大教授の箕作佳吉博士。

とばっこミニ知識

40 鳥羽で養殖されている海藻で、もっとも生産量が多いのは何でしょう?

☆クロノリ。菅島や答志島で養殖され、鳥羽産は品質がよいと、高く評価されています。

# 幸吉と妻うめ

幸吉は23歳のとき、旧鳥羽藩の武家の娘・久米森造の長女で、17歳のうめと結婚しました。

うめは明るくて賢く、武家の娘らしく、がまん強い性格で、幸吉もうめが妻なら自分の仕事のことを理解してくれると思いました。

結婚して幸吉は、鳥羽・志摩の魚や貝類を扱う海産物商に商売を拡げていき、町の人からも信用を高めていました。その後、ひとりで真珠養殖もはじめるようになり、周りの人たちから、悪口を言われた時も、うめは「成功するかしないかは運。運は天に任せて、どうかやり通してください。」と、夫を信じて励まし続けたのです。

しかし、半円真珠が誕生して3年後、うめは病気により32歳の若さで亡くなりました。このとき、幸吉には女4人、男ひとりの子が残され、末っ子の長男はわずか２歳でした。

のちに幸吉は「わしが今日あるのは、うめのおかげ。成功は妻のたまもの。」と語っています。

うめは夫・幸吉の真珠養殖の成功を信じて励ましました。

幸吉の家族。うめは子どもとともに幸吉の留守を守りました。1895(明治28)年

真円真珠の養殖をはじめたころの幸吉。



とばっこミニ知識

41 イセエビがとれる季節は?

☆秋から春。10月ごろから、地区が決めて漁が始まり、全国へ出荷されます。

# 養殖真珠の誕生



幸吉は早速、志摩の神明浦で真珠養殖の実験を始めることにしました。

箕作佳吉博士の「貝を死なさずに貝の内部に小さな粒を入れ、海の中で何年か飼っておくことができたら、真珠はできるはずです。」という助言を受け、すぐに、実行に移したのです。そして、来る日も来る日も海にでかけて、いろいろな実験をしてみました。貝に入れる小さな粒は南京玉（ビーズ）や陶土（陶器の原料の土）など、あらゆる物を試し、海にアコヤ貝をばらまきましたが、どれもはき出してしまいます。

「ダメか。」幸吉は何度もくじけそうになります。しかし、妻のうめの励ましもあり何としても成功しようと、雨や風の吹く日も毎日毎日、海に通いました。

英虞湾だけでなく、鳥羽の相島（ミキモト真珠島）でも実験を行い、ここで

養殖真珠誕生を描いた伊勢正義画伯の絵「待望のとき」。（ミキモト真珠島で展示）

はばらまき式ではなく、アコヤ貝を竹籠に入れて海に沈めるやり方にかえました。前年、英虞湾に真っ赤な赤潮が発生し、アコヤ貝が大量に死に、もう残されたのは相島の貝5000個だけでした。

1893（明治26）年7月11日、この日も祈るような気持ちで、２人は相島に行き、水揚げした竹籠の貝を開いていきました。すると、うめが開いた貝の中から、合わせて５個の輝く半球の真珠（半円真珠）が見つかったのです。人類初の養殖真珠の誕生の瞬間です。

貝についた半円真珠。

明治のころの相島。（ミキモト真珠島）

とばっこミニ知識

42「イタボ」というのは、どんなもの?

☆岩ガキのこと。夏にとれるので夏ガキともいわれ、冬の養殖マガキより身が大きいです。

# 真円真珠への夢

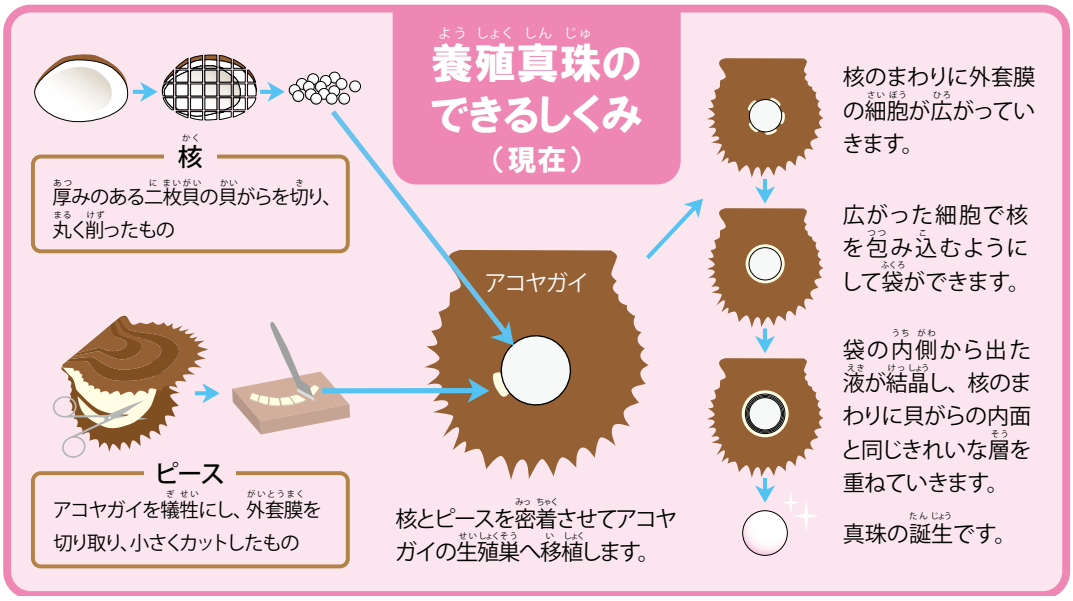
半円真珠誕生の喜びに浸るひまもなく、幸吉は本格的にまん丸の「真円真珠」の養殖に取り組みます。志摩の英虞湾に浮かぶ無人の小島・多徳島に養殖場をつくり、まわりの一帯の海を漁場としました。

しかし、そのころの養殖技術といえば、小さな粒（核）をアコヤ貝の体内に素早く入れ、海女が海底に潜って直接まく方法が中心でした。しかし、ばらまいたあと、ほとんどの貝はすぐに粒をはき出してしまいます。

そんなとき、養殖場に、研究員として働いていた鳥羽の歯医者・桑原乙吉に相談しました。すると、桑原は今日の養殖技術につながる“全巻式”を考案しました。それは、別のアコヤ貝の外套膜（貝の体の表面をおおう半透明の膜）を切り取り、その中に粒を包み込み、養殖するアコヤ貝の中に入れる方法です。

この“全巻式”により、真円真珠への道が大きく開かれるようになりました。

また、赤潮や冷たい海水、天敵のタコから貝を守るために、これまで海に貝を直接ばらまいていたやり方から、アコヤ貝をかごに入れて海面につり下げる“垂下方式”に変え、真珠の生産量を増やしていきました。




とばっこミニ知識

43 養殖真珠は、できるまで何年ぐらいかかるのかな？

☆貝の子どもを育てるのに約2年、核を入れてから取り出すまで約2年かかります。

# 博覧会で注目を集めた養殖真珠



幸吉は養殖真珠の成功を人々に広く伝えようと、国内外の博覧会へ進んで参加し、真珠をたくさん使ったごうかな工芸品を出品しました。それらの工芸品は真珠博物館（ミキモト真珠島）に展示されています。

1926（大正15）年にアメリカ合衆国のフィラデルフィアで開催された万国博覧会には「御木本五重塔」を出品しました。1937（昭和12）年のパリ万博に出品した「矢車」は、真珠のほかにダイヤモンドやサファイアも組み合わせた、きらびやかなジュエリーでした。

そのころ、日本とアメリカの関係はだんだん悪くなっていましたが、少しでも改善したいと、幸吉は1939（昭和14）年のニューヨーク万国博覧会にも参加しました。その記念作品として選んだのが、アメリカ独立のシンボルともいえる「自由の鐘」でした。

法隆寺の五重塔を型どり、1万2,760個の真珠を使った豪華な「御木本五重塔」。

鐘の周囲にはネックレス状の真珠を一列ずつ巻きつけて固定し、正面の青い真珠は実際の鐘にあるひび割れを表現しています。

博覧会を通じて、日本の養殖真珠は世界中に知られるようになり、見る人をおどろかせることから、幸吉は「博覧会男」と呼ばれました。

1万2,250個の真珠と366個のダイヤモンドを使用した「自由の鐘」。

パリ万国博に出品された「矢車」。12のちがったジュエリーに変身するのが特徴です。

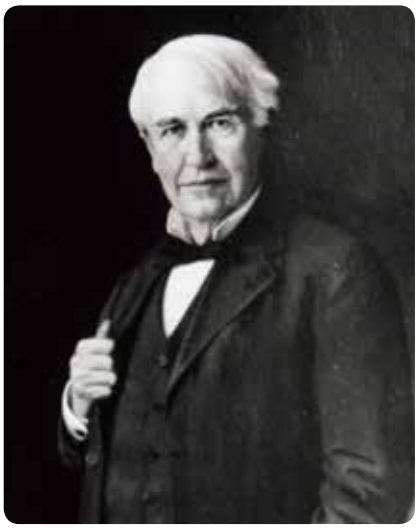
とばっこミニ知識

44 日本で一種類しか見られない、渡りをする大型のチョウの名前は？
☆アサギマダラ。神島や答志島では、秋には南へ向けて海を渡る前の群れが見られます。

# 発明王が認めた「世界の真珠王」

1905(明治38)年、明治天皇が伊勢神宮に参拝に訪れたとき幸吉は、「これからも研究を重ね、必ず真円真珠をつくりだす覚悟でございます。」と、真円真珠にかける決意を伝えました。その後、立派に真珠の養殖技術を完成させ、その言葉を実現させたのです。

また、いつも広い目で物事を見て、世界の出来事に興味を持っていた幸吉は、69歳のときに世界旅行をします。そしてニューヨークこう外に住むトーマス・エジソン（1847―1931）の自宅を訪ねました。そのときエジソンはこう言ったそうです。「わたしにはできなかったものが2つだけある。ひとつはダイヤモンド、もうひとつは真珠だ。



あこがれのトーマス・エジソン。

多徳養殖場（今の志摩市）に来た昭和天皇（右）と幸吉。

あなたが真珠を発明し、完成させたことは、まさに世界のおどろきだ。」世界の発明王から「世界の真珠王」としてほめたたえられ、御木本幸吉とミキモト・パール（真珠）の名はアメリカの全土に知れわたりました。

また、戦後の1951（昭和26）年、天皇・皇后が志摩の多徳養殖場に来た時、93歳になった幸吉は、昭和天皇の母から贈られた杖を片手に持ち、桟橋まで迎えました。（上の写真）

エジソンが発明したもので有名になったものは何？

とばっこミニ知識

45 核を入れたアコヤ貝からは、みんな真珠が取れるのかな？
☆途中で死んでしまう貝もあり、品質のよい真珠は、全体の約5％しか取れません。

# ふるさと発展のため 伊勢志摩を国立公園に

幸吉は誰よりもふるさと思いの人でした。真珠のほかにも、伊勢志摩の美しい景色を広く紹介しようと、大切なお客があるたびに真珠島や志摩の別荘に招きました。伊勢志摩を公園にしたいという願いは、戦後すぐの1946（昭和21）年、伊勢志摩国立公園が指定されて実現しました。

伊勢志摩の中心にあるながめのよい朝熊山には、私財を投じて道などを整備しました。山頂をはさんで東西に公園を設け、観光の周遊コースとする構想をえがいていました。

朝熊山にある金剛證寺とその奥の院を、少年のころから信仰していた幸吉は、事業が成功してからも長生きと健康を願い、たびたびお参りしました。また60歳からは夏の2、3週間を山上近くの別荘「連珠庵」で過ごしました。

その他、伊勢市の内宮と外宮を結ぶ御木本道路の整備や志摩市の深谷水道、南伊勢町の能見坂トンネルなどの整備や改修に寄付をしました。

幸吉は事業を拡大する一方で、伊勢志摩におしみない愛情を注いだのでした。

1975（昭和50）年、英国のエリザベス女王夫妻が真珠島を訪れました。

鳥羽港ではクルーズ客船の出港時に「リメンバー赤いハンカチ」というおもてなしを行っています。これは幸吉が渡米するとき、ステッキの先に赤いハンカチを巻き付けて家族に振ったことにちなみます。

1955（昭和30）年のミキモト真珠島。養殖真珠誕生の地は公開後、すぐに評判となりました。



とばっこミニ知識

46 鳥羽の海水浴場は、どこにある？

☆浦村町の白浜や相差町の千鳥ヶ浜、市営の安楽島海水浴場のほか、離島にもあります。

# 御木本幸吉ゆかりのところ

古くから風待ち、日和待ちで栄えた港町には、幸吉ゆかりの場所が残っています。

## お気に入りの風景　日和山

ほかけ船の時代、天気を確かめるために船乗りは日和山に登ったといいます。頂上までは10分ほどで、幸吉はここからのながめが大のお気に入りでした。５人の子どもを早朝散歩に連れ出しては、海から昇る朝日を見せました。また展望台と茶店を整備し、知人に美しい風景を自慢しました。

日和山展望台までの道が整備されています。

## 狂言を演じた　賀多神社

鳥羽の氏神である賀多神社では、昔から神社の祭りの時には能や狂言が催されていました。少年のころ、体をひっくりかえし、足で傘をまわす足芸や狂言に夢中だった幸吉は、京都から来た狂言師について熱心に習い、短期間に免許を与えられ、舞台に出て人気者になりました。

賀多神社。

## 幸吉の墓のある　済生寺

生家からほど近い済生寺は御木本家の先祖代々の寺で、幸吉の墓もこの寺にあります。寺の裏手の斜面に墓地が広がり、幸吉の墓は人柄をしのばせるように、簡素に建てられています。向かいには日和山、眼下に鳥羽の町並みが見渡せます。

小高い丘にある幸吉の墓。

## 父の病気回復を祈った　常安寺

幸吉は病弱だった父・音吉のために、12、3歳のころ、２年間、毎月7日に常安寺の薬師堂にこもって病気回復を祈りました。その願いが通じ、父親は元気になりました。

常安寺薬師堂。

とばっこミニ知識

47 伊勢市にある伊勢神宮の内宮近くと、鳥羽市を結ぶ観光道路の名前は？
☆伊勢志摩スカイライン。朝熊山を通り、海と山の展望が楽しめる有料道路です。

# ミキモト真珠島

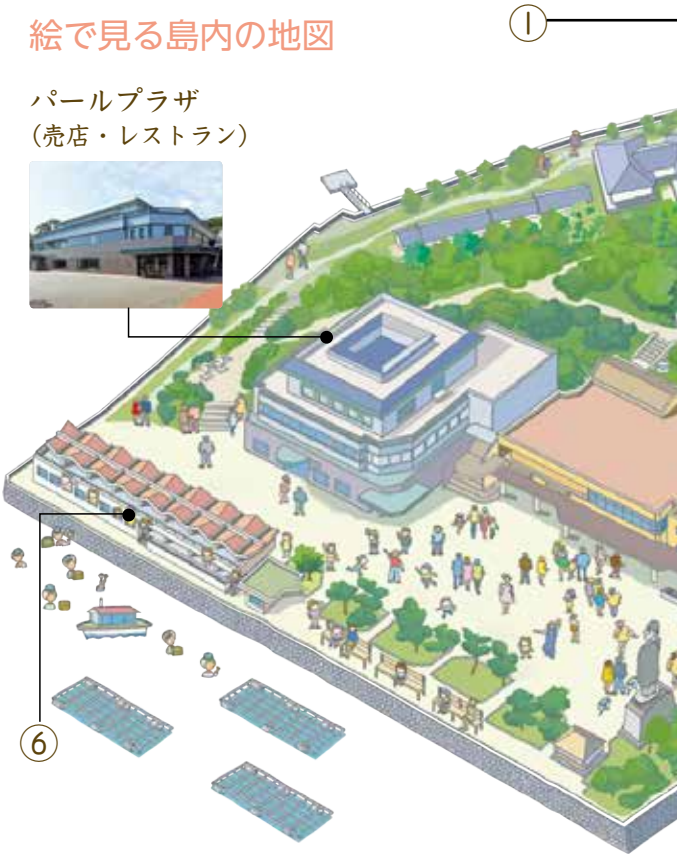


おだやかな鳥羽湾にうかぶ小さな島がミキモト真珠島です。島内の真珠博物館では真珠を歴史・文化・科学・産業などいくつかの視点から紹介しています。伝統的な海女の実演も行われています。

この島は元の名を「相島」といいます。世界で初めて半円真珠の養殖に成功した歴史的な場所で、志摩市の英虞湾にある神明浦と並び養殖真珠発祥の地でもあります。相島は1951（昭和26）年、全島を整備し、当初は「御木本真珠ヶ島」の名で公開され、以来、日本の皇室をはじめ、英国のエリザベス女王など、各界の重要な人物を迎えてきました。G7伊勢志摩サミットでは配偶者プログラムが催され、日本と参加国の首脳夫人らが訪れました。

空から見たミキモト真珠島。

## 絵で見る島内の地図




### ①御木本幸吉記念館

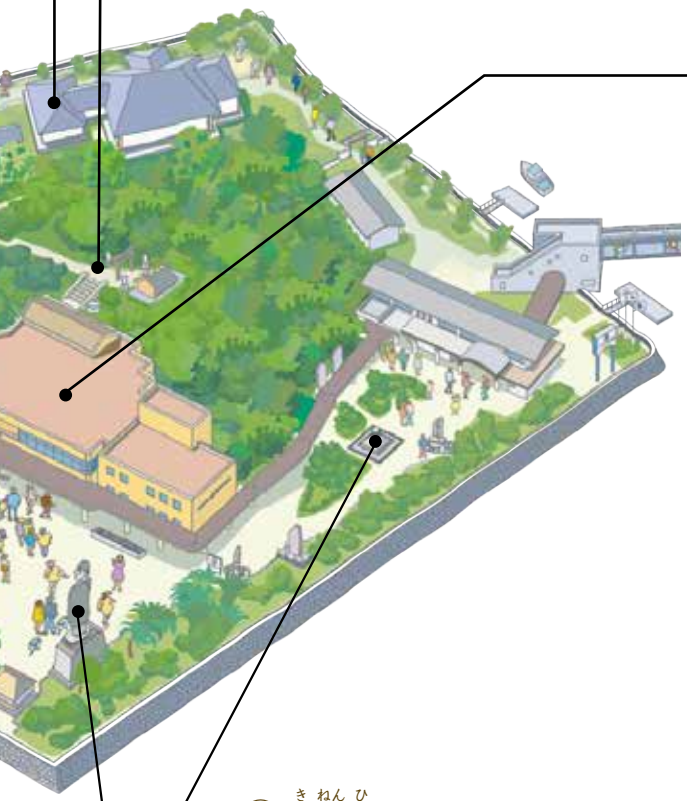
幸吉の人生と業績が、当時使っていたラジオやコレクションの恵比寿像などの展示や写真、パネルにより説明されています。鳥羽に残る幸吉の足跡、当時の鳥羽の様子がわかるジオラマなど、郷土との関わりもテーマとなっています。

とばっこミニ知識

48 海女さんがとる「テングサ」という赤紫色の海藻は、どうやって食べるの？
☆寒天ゼリーやトコロテンの材料です。水洗いと天日干しをくり返し、白くさらして煮ます。

## ② 珠の宮

相島と呼ばれていたころから島を見守り続けてきた社です。



## ③ 記念碑

真珠にまつわるモニュメントや石碑などが、至る所に置かれています。

## ④ 銅像

トレードマークの山高帽子にマントを身に付け、つえを持った幸吉の銅像です。高さは３ｍ 75ｃｍ。

## ⑤真珠博物館

### １階・真珠の工程

真珠のできる仕組みや養殖方法などを実物や標本、映像などを使って解説しています。また、真珠のネックレスの製作工程も紹介しています。

### ２階・真珠の歴史とジュエリー

天然真珠のアンティークジュエリー（古くて価値のある装飾品）や博覧会に出品した真珠の工芸品をはじめ、養殖真珠の初期の時代に活やくした人々の紹介など、人と真珠の関わりを展示しています。

## ⑥海女スタンド

昔ながらの海女作業を知ってもらうため、海女の実演が１日８～９回※行われています。白い磯着姿の海女が勢いよく海に潜り、アコヤ貝を手に海面に戻ってきます。

※天候、日没時刻等により変更。

**とばっこミニ知識**

49 真珠養殖で、アコヤ貝から真珠を取り出す「浜あげ」作業をする季節は、いつごろ？

☆冬に取り出します。海水温が下がると、真珠は美しいかがやきを増すからです。

# 真珠王のことば

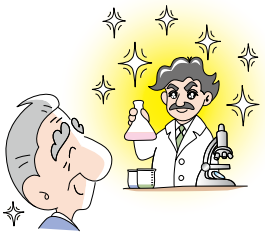
幸吉の生涯は、成功のかげに多くの失敗と苦しみ、そして、人の何倍もの努力がありました。そんな幸吉の残したことばを紹介します。

## 1「世界中の女性の首を真珠でしめてご覧に入れます」

1905（明治38）年、幸吉は明治天皇が伊勢神宮に参拝されたとき、幸吉は真円真珠をつくりだす決意とともに「世界中の女性の首を真珠でしめてご覧に入れます。」と言った、と伝えられています。まだ、目標とする真円真珠は成功していませんでしたが、幸吉は目標を人に話すことで、夢を実現させていったのです。

## 2「希望ある人間はどこか輝かしいものをもっている」

幸吉は68歳の時、外国に視察旅行に出かけました。ニューヨーク（アメリカ）では黄熱病の研究で知られた野口英世博士の研究所に度々訪ね、面会しました。野口博士は50歳。熱帯地域で発生する黄熱病の撲滅に意欲的に取り組んでいる最中でした。このとき、野口博士の姿に深く感銘を受けた幸吉は、その後「希望ある人間はどこか輝かしいものをもっている。」と語り、若者たちを励まし続けました。



## 3「わしは、毎日地球を3回まわっている」

幸吉の部屋にはラジオと陶製のホラ貝と地球儀がいつもそばにありました。ラジオは定時のニュースを聞くためで、ホラ貝は「おおほら吹き」と言われた幸吉のお気に入り。地球儀は外国に視察旅行のときに気にいって買ったものです。幸吉はその地球儀を眺めてはグルグルとまわし、そして、「わしは、毎日地球を３回まわっている。」と言いました。幸吉の目はいつも世界に向けられていました。

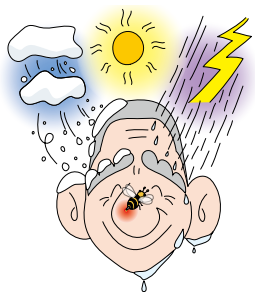
## 4「わたしのつくる真珠は人の涙の結晶です」

1929（昭和4）年、志摩の養殖場を訪ねたアメリカの元大統領ウイルソン氏の夫人を幸吉が案内したときでした。夫人が「真珠は月のしずくという伝説がありますね。」というと、幸吉は「わたしのつくる真珠は人の涙の結晶です。」と応えました。なぜ、このように応えたのでしょうか。それは若くして亡くなった妻うめの姿が

浮かんだからにちがいありません。真円真珠の成功をうめに見せられなかった悔しさを「涙の結晶」と言ったのでしょう。

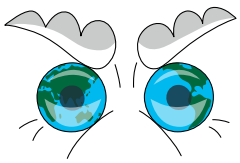
## 5「いかなる場合でも決して、笑いを忘れるな」

幸吉は若者を大事にし、応援しました。1938（昭和13）年、鳥羽の堅神町（現・池上町）にある鳥羽商船学校（現・鳥羽商船高等専門学校）の卒業式に招かれたときのことです。「わたしが卒業生諸君に贈ることばは、いかなる場合でも決して笑いを忘れるな、ということです。」「永い航路には荒波もあれば穏やかな日もある。いつも、朗らかに笑って乗り切ってこそ、何事も成し遂げられる。」と祝辞をのべました。それは真珠養殖一筋に人生を歩んできた、事業を通じて得た幸吉の人生訓でもありました。



## 6「海外に出よ。尻込みはダメだ」

幸吉の夢の一つ、それは海外進出でした。真珠養殖が順調に行き始めた1897（明治30）年代から世界各地で開催される万国博覧会に真珠を使った工芸品を毎回出品してさまざまな賞を受賞しました。また、早くからニューヨーク（アメリカ）、ロンドン（イギリス）、パリ（フランス）、上海（中国）などに支店や小売店を開設しました。幸吉は「海外に出よ。尻込みはダメだ。」と言って、1929（昭和４）年に世界の経済が混乱したときも、海外に支店を出してピンチを切り抜けました。



## 7「わしは、志摩の尊徳になって小学生の手本になる」

かつて、どこの小学校の校庭にも歩きながら本を読む尊徳（二宮金次郎）の銅像が建っていました。二宮金次郎は小さいころに両親をなくしましたが、逆境にもめげず、朝から夜までよく働き、また独学で勉強し、やがて農村復興の指導者になり農民から慕われるようになりました。幸吉は、尊徳をとても尊敬しており、常々「わしは志摩の尊徳になって、小学生の手本になる。」と言って人々や地域の役に立つことを次々に実現していきました。そして1947（昭和22）年には、小学校５年生の国定教科書（国語）に御木本幸吉のこれまでの歩みが物語風にのせられました。

## 8「智・運・命」

幸吉は、96歳まで長生きしました。90歳を超えると、人から頼まれた色紙などには「智・運・命」と書くようになります。「智」は人生を切り開く智恵のこと、アイデアでもあります。「運」は幸運の“運”。いくら、いい智恵が出ても運が味方をしないと、ことはうまく運びません。

最後は「命」。幸吉は健康に心がけて96歳という長寿に恵まれて、真珠事業を完成させたのです。